

英語の属格の獲得について

On the Acquisition of Genitive Case in English

福田 稔

母語としての英語獲得の初期段階にある子どもは、持ち主と物との所有関係を表すのに属格人称代名詞 (genitive personal pronoun) を用いて持ち主を表すのに、普通名詞や固有名詞には属格'sを付けずに表す。この事実を説明するために最近の研究から次の2つを前提とする。第一に、名詞句に節構造に対応する左周辺部 (Left Periphery) があり、節構造も名詞句構造も3つの階層に分かれる。第二に、3つの階層構造はそれぞれ対応するインターフェイスで解釈を受ける。これらを基に本稿は3つの仮説を提案する。(i) 統語領域XP (左周辺部) の解釈をするインターフェイスは、XPより下位の統語領域YPに付加された要素も解釈する。(ii) ある範疇Xが獲得されていない段階でも、子どもは既に付加構造を獲得しているので、XPがなくても下位のYPへの付加要素をXPのためのインターフェイスで解釈する。(iii) その範疇Xが獲得されると、YPへの付加要素をXの指定部として再分析し、XPのためのインターフェイスによって解釈するようになる。本稿の提案は、現代英語において所有属格を表すDPは名詞句内部の話題 (topic) であるという分析と一致する。また、3種類の属格名詞 (主格属格、所有属格、時間名詞属格) の名詞句内部での統語位置と属格'sの投射に関する相違は、英語獲得の過程の名残であると論じる。

キーワード：属格、人称代名詞、主格属格、所有属格、左周辺部、言語獲得、英語、DP

目次

- I はじめに
- II 英語の属格名詞
- III 属格'sの獲得
- IV 属格人称代名詞の獲得
- V 問題
- IV 左周辺部の獲得
- VII 提案
- VIII おわりに

I はじめに¹

本稿は、生成統語論、取り分け、Chomsky (1995) のミニマリスト・プログラムを前提として、持ち主と物との所有関係を表すのに用いられる属格の獲得に関する英語の事実を説明することを目標とする。O'Grady (1997)、Radford (1990)、Vainikka (1993/1994) らが指摘するように、母語としての英語獲得の初期段階にある子どもは、所有関係を表すのにmyなどの属格人称代名詞 (genitive personal pronoun) を用いて持ち主を表す。しかし、同じ時期の子どもは普通名詞や固有名詞に対しては属格'sを付けずに裸の名詞 (bare NP) で表す。

この獲得に関する事実を説明するために、近年の統語研究の中でも、特に次の2つの仮説を本稿では前提とする。まず、名詞句に節構造に対応する左周辺部 (Left Periphery) があり、節構造も名詞句構造も概ね3つの階層に分かれると仮定する (Aboh et al. (2010) を参照)。さらに、Platzack (2001a) に従い、これら3つの統語領域がそれぞれ対応するインターフェイスで解釈されると仮定する。これらの仮説のもとで、本稿は次の3つの仮説を提案する。

- (1) 例えば、左周辺部のような統語領域XPの解釈をするインターフェイスは、XPより下位の統語領域YPに付加された要素もXPにある要素として解釈する。
- (2) 子どもは初期の段階で既に付加構造を獲得している。よって、範疇Xをまだ獲得していない段階でも、XPより下位のYPへ付加された要素ZPをXPのためのインターフェイスでの解釈が可能となる。
- (3) 範疇Xが獲得されると、Xが構成するXPが対応するインターフェイスによって解釈されるようになる。

本稿は次の構成となっている。第2節では、現代英語の属格名詞の種類に関するQuirk et al. (1985 : 321-322) による分析を概観する。第3節では、獲得の初期に属格'sが顕在的に現れないという事実を紹介する。しかし、同じ時期に属格人称代名詞が用いられているという事実を第4節で紹介し、Vainikka (1993/1994) の分析を概観する。第5節では、Vainikka (1993/1994) の分析が第3節で考察する事例において、属格'sが現れることを予測すると指摘する。第6節ではPlatzack (2001b) とMarinis (2004) の節構造と名詞句構造の獲得に関する研究を紹介する。それをもとに第7節では第5節で指摘した問題を解決する。属格'sが現れていない場合、その句は左周辺部より下の構造へ付加されており、通常の格認可が行われる領域の外にある。その位置は左周辺部なので左周辺部のためのインターフェイスで解釈を受けると論じる。そして最後に第8節で議論をまとめる。

本稿の提案は、現代英語において所有属格を表すDPは名詞句内部の話題 (Topic) であるというHamamatsu (2000 : 77) や福田 (2011) の分析と一致することになる。また、福田 (2011) は主

格属格、所有属格、時間名詞属格という3種類の属格名詞は名詞句内部の位置と、属格'sがどのような統語構造に投射しているかという点に関して異なると論じているが、これにも英語獲得の観点から支持する根拠を与えることになる。

II 英語の属格名詞

学校英文法では「所有格」という名称が用いられているが、所有は属格が持つ意味・用法の1つに過ぎない。事実、次に示したように所有はQuirk et al. (1985: 321-322) の属格の8つの分類の1つである²。

- (4) 所有属格 (possessive genitive)
 - a. *Mrs Johnson's* passport (Mrs Johnson has a passport.)
 - b. *the earth's* gravity (The earth has (a certain) gravity.)
(Cf. the gravity *of the earth*)
- (5) 主格属格 (subjective genitive)
 - a. *the boy's* application (The boy applied for ...)
 - b. *her parents'* consent (Her parents consented.)
(Cf. the decline *of trade* (Trade declined.))
- (6) 目的格属格 (objective genitive)
 - a. *the family's* support ((...) supports the family.)
 - b. *the boy's* release ((...) released the boy.)
(Cf. a statement *of the fact* ((...) stated the fact.)
- (7) 起源の属格 (genitive of origin)
 - a. *the girl's* story (The girl told a story.)
 - b. *the general's* letter (The general wrote a letter.)
 - c. France's wines (France produces wines.)
(Cf. the wines *of France*)
- (8) 記述属格 (descriptive genitive)
 - a. a *women's* college (a college for women)
 - b. a *summer's* day (a summer day / a day in the summer)
 - c. a *doctor's* degree (a doctoral degree / a doctorate)
(Cf. the degree *of doctor*)
- (9) 度量の属格 (genitive of measure)
 - ten days'* absence (The absence lasted ten days.)

(Cf. an absence of ten days)

(10) 限定の属格 (genitive of attribute)

a. *the victim's* courage (The victim had courage. / The victim was courageous.)

b. *the party's* policy (The earth has a (certain) policy.)

(Cf. the policy of the party)

(11) 部分属格 (partitive genitive)

a. *the baby's* eyes (The baby has (blue) eyes.)

b. *the earth's* surface (The earth has a (rough) surface.)

(Cf. the surface of the earth)

さらに天野 (2006 : 2) とDeclerck (1998 : 253) は次の2種類をあげている。

(12) 時間名詞属格 (genitivized temporal nouns)

today's event

(13) 場所名詞属格 (genitivized place names)

a. *Liverpool's* history

b. *Asia's* future

次の第3節と第4節では、英語の獲得の過程で子どもの発話に属格がどのように現れるか(または、現れないか)という記述的な考察を行う。

III 属格'sの獲得

前節の事例からわかるように、現代英語において属格は典型的には名詞に付加する'sとして現れる。しかし、(14)のように名詞の決定詞(determiner)として属格人称代名詞が現れる場合もあるが、その獲得については次節で考察する。

(14) *my/your/his/her/our/their* books

名詞に付加した属格'sの獲得に関して興味深い事実がある。Braine (1976) の考察に基づいて、O'Grady (1997 : 66) は統語発達が始まって間もない、最初の数ヶ月は名詞に属格'sが生じないと述べている³。つまり、(4)から(13)の例と異なり、幼児が英語を獲得していく初期には明示的に属格'sは生じないのである。例えば、(15)はBraine (1976 : 34) が考察した2歳のJonathanの発話事例、(16)はBloom (1970 : 54-69) が考察した1歳9ヶ月のKathrynの発話事例、(17)は

Bloom (1973 : 233-257) が考察した 1 歳10ヶ月の Allison の発話事例である。これら全てが前節で概観した (4) の所有属格に対応しているということに注意されたい。

- | | | | |
|------|-----------------------------|--------------------------------------|------------------------------|
| (15) | <i>Daddy coffee,</i> | <i>Daddy bread,</i> | <i>Daddy car,</i> |
| | <i>Daddy door,</i> | <i>Daddy hat,</i> | <i>Daddy chair,</i> |
| | <i>Daddy butter</i> | <i>Daddy eat (= 'Daddy's food'),</i> | <i>Daddy book,</i> |
| | <i>Andrew book,</i> | <i>Mommy book,</i> | <i>Daddy cookie,</i> |
| | <i>Daddy tea,</i> | <i>Mommy tea,</i> | <i>Daddy shell,</i> |
| | <i>Daddy juice,</i> | <i>Elliot juice,</i> | <i>Elliot diaper</i> |
| (16) | <i>Mommy haircurl (er),</i> | <i>Mommy cottage cheese,</i> | <i>Wendy cottage cheese,</i> |
| | <i>Baby cottage cheese,</i> | <i>Cat cottage cheese,</i> | <i>Mommy milk,</i> |
| | <i>Baby milk,</i> | <i>Mommy hangnail,</i> | <i>Mommy vegetable,</i> |
| | <i>Mommy pigtail,</i> | <i>Mommy sock,</i> | <i>Kathryn sock,</i> |
| | <i>Mommy slipper,</i> | <i>Mommy shoe,</i> | <i>Jocelyn cheek,</i> |
| | <i>Tiger tail,</i> | <i>Sheep ear</i> | |
| (17) | <i>Allison cookie,</i> | <i>Baby cookie,</i> | <i>Put away Allison bag,</i> |
| | <i>Baby diaper,</i> | <i>Baby back,</i> | <i>Wiping baby chin</i> |

O'Grady (1997 : 66) が示唆するように、上記の事例のような 2 語が並んだ語順は属格'sが顕在的に現れている場合の語順と同じなので、属格'sが無くても解釈に困難は生じることはなく、最初の名詞が所有者であると理解できると考えられる⁴。

名詞句に属格'sが生じないというこれらの事実をRadford (1990) は、範疇がN、V、Aなどの語彙範疇 (lexical category) と、D、C、Tなどの機能範疇 (functional category) の2つに分類できることに着目し、言語獲得の初期 (生後20ヶ月で、前後20%の誤差がある) において子どもは語彙範疇しか獲得しておらず、語彙・主題構造 (lexical-thematic structure) を用いるだけで、機能範疇が欠落した構造を持つと論じている。

ここで英語の名詞句の構造分析を手短に概観してみよう。一般に英語の名詞句はDPを形成していると広く仮定されているので、John's old carという名詞句の構造は属格'sが主要部Dを占める(18)となる (Abney (1987) を参照)。

- (18) [DP John [D' [D 's] [NP old car]]]

Radford (1990) は獲得の初期段階ではDを含めた機能範疇が無いと仮定しているので、属格'sを欠く名詞句Daddy new carは(19)の構造を持つことになる。もう1つの可能性として、Radford

(1990 : fn. 3) は、(20) に示したように、DaddyはNPに付加した付加詞であり、その主題役割は語用論の仕組みによって決まると示唆している⁵。

(19) [NP [NP Daddy] [N' new car]]

(20) [NP [NP Daddy] [NP new car]]

Radford (1990 : 218) は、生後24ヶ月頃(前後20%の誤差がある)に機能範疇を獲得し、それが構成する機能・非主題構造を使うようになると論じている。見方を変えると、D、C、Tなどの機能範疇が独立して、別々の時期に発生することはなく、これらの範疇全てが同時期に発達するという予測になる。言い換えると、DP、CP、TPの使用時期は同じになるはずである。また、Radford (1990 : 203) は、人称代名詞はDPの主要部を占めるので、英語獲得の初期に人称代名詞の使用が見受けられないのは、名詞句にDの投射を欠くためであると説明している。しかし、Radford (1990) の提案は、第4節と第5節で考察するように属格人称代名詞が早い時期に生じるという事例を説明できないという問題に直面する。

IV 属格人称代名詞の獲得

1 獲得の時期

人称代名詞は単語で人称・数・格を同時に表すことができるという特徴を持つ。幼児が人称代名詞を獲得する過程について、Vainikka (1993/1994) は言語獲得のコーパスであるCHILDESを利用して、詳細な考察を行っている。その概要を被験者となる子ども毎にまとめているが、ここでは紙面の関係上、また、議論を分かりやすくするためにNinaの発話資料を基にしたVainikka (1993/1994) の考察を紹介する。

Ninaの発話に関する資料を2歳までのファイル1～6と、2歳から2歳1ヶ月までのファイル7～9に分けてVainikka (1993/1994) は考察している。Vainikka (1993/1994 : 270-274) は属格人称代名詞に関する結果を以下のように要約している。

(21) ファイル1～6から分かる事実

- a. 名詞句に生じる所有を意味する属格人称代名詞はmyだけである。3人称の属格人称代名詞はない。
- b. Myが主語として最も多用される代名詞である。

(22) ファイル7～9から分かる事実

- a. My、his、itsが所有を意味する属格人称代名詞として用いられる。
- b. My、his/he's、its/it's、meが主語として用いられる。

特にVainikka (1993/1994 : 273) はファイル 1 ~ 6 を詳細に分析し、属格人称代名詞myを多用する時期の直後にmyを主語として用いる事例が多く見受けられるという傾向を指摘している。

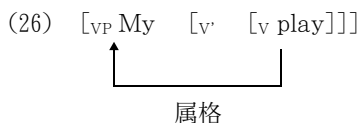
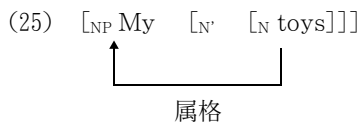
2 構造格としての属格

格付与の仕組みとしてChomsky (1981 : 170) は (23) を提案している。ここで属格はNの投射内での構造条件が満たされると自動的に付与される構造格(Structural Case)として位置づけられている。

- (23) a. NP is nominative if governed by AGR.
 b. NP is objective if governed by V with the subcategorization feature: $_ NP$ (i.e., transitive)
 c. NP is oblique if governed by P
 d. NP is genitive in $[NP _ X']$
 e. NP is inherently Case-marked as determined by properties of its $[-N]$ governor

その後Chomsky (1986a) は格理論の修正を行い、主題役割と関連させた属格付与の新たな提案をした。しかし、Vainikka (1993/1994) はChomsky (1981) の (23) を採用し、英語獲得の事実に基づいて次の仮説を提案している。

- (24) a. 初期にはN、V、Aなどの語彙範疇は獲得されているが、D、C、Tなどの機能範疇はまだ獲得されていない (Radford (1990) を参照)。
 b. Dが欠落している時期においても、NによってNPの指定部のNPに属格が付与される。
 c. NPの属格付与が過剰的にVPにも適用され、VがVPの指定部のNPに属格が付与されてしまう。この格付与は大人の文法では許されなくなる。



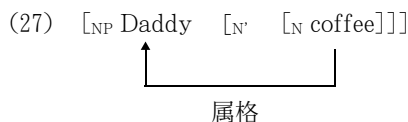
つまり、(25)の属格付与の過剰適用の結果、(26)のVP内部でも属格付与を許してしまうというのである。この仮説によって、属格人称代名詞myを多用する時期の直後にmyを主語として用いる事例が多く見受けられるという、前節で指摘した事実が説明可能となる。

V 問題

Rodford(1990)は子どもが属格人称代名詞を文主語として用いる事例の説明を行っていないが、第4節で概観したように、Vainikka(1993/1994)は、NPでの属格付与がVPに過剰に適用されるという分析によって説明を試みている。

一方、Rodford(1990)は普通名詞や固有名詞に属格'sが付加する事例がほとんどないことを指摘し、その分析法を示唆しているが、Vainikka(1993/1994)は脚注で触れただけで、具体的な分析をしていない。具体的には、Vainikka(1993/1994:fn.16)は、Ninaの発話記録のファイル1～6には、普通名詞や固有名詞に属格'sが付加する事例はほぼ無く、ファイル7～8では多くなっているものの、依然として属格'sが付かない裸のNPを所有属格名詞として使っているという事実を指摘している。この事実によって新たな問題が生じる。

もし、第4節でのVainikka(1993/1994)の提案が正しければ、子どもは早い段階でNが属格を付与することを獲得していることになる。よって、NPの主要部Nは人称代名詞だけでなく、普通名詞や固有名詞にも属格を与えると予測される。また、普通名詞や固有名詞への属格付与はVPへの拡張の前に生じていても不思議ではない。つまり、(25)や(26)と同じように、(15)から(17)の事例においても(27)のような格付与が行われるはずである。



しかしながら、既に考察したように、子どもが属格人称代名詞を用いる時期であっても、人称代名詞以外のNPには属格'sは生じない。それはなぜなのかという問題が生じる。

この問題を回避するために、「Nが属格を与える要素を人称代名詞に限り、普通名詞や固有名詞などのNPは属格付与の対象としない」という条件を幼児の格付与の仕組みに課すことが考えられる。しかし、これは事実を条件として言い直しただけに過ぎず、説明にはならない。本稿では、名詞句での属格人称代名詞の構造位置と普通名詞や固有名詞などのNPの構造位置は異なり、後者は格付与の範囲の外にあるので属格'sは付与されないと論じる。

VI 左周辺部の獲得

Marinis (2004) は5人の子どもが現代ギリシャ語を習得する過程を考察し、Platzack (2001a) の3つの階層構造に関する仮説を取り入れて、名詞句の左周辺部の獲得に関する分析を提示している。そこでまず、Platzack (2001a) の提案を概観してみよう。

Chomsky (1986b) の提案以来、節構造がVP、IP、CPの3層から成るという仮説は現在では広く受け入れられている。VPは動詞Vが主要部となる語彙的な層であり、主題役割が決定される領域とされている。機能範疇Iが主要部であるIPは動詞の形態が決まり、格や一致の認可が行われる領域である。そして、CPは補文標識Cが主要部となり話題句や演算子の移動先となる領域である。Platzack (2001a: 23-24) はこれら3つの統語領域が(28)のように3つのインターフェイスと対応関係にあり、それぞれの構造がそれぞれのインターフェイスで解釈されると論じている⁶。この分析において、構造上の最上位にあるC-domainはRizzi (1997) の左周辺部 (Left Periphery) に対応している。

(28) 節構造 :	C-domain (CP)	I-domain (IP)	V-domain (VP)
インターフェイス :	Discourse Form	Grammatical Form	Thematic Form

Marinis (2004) は3つのインターフェイス・レベルは生得的に備わったものであり、獲得される必要はないが、それぞれに対応する範疇の獲得はそれとは独立して行われると仮定し、また Platzack (2001b) は、スウェーデン語とドイツ語の言語獲得の分析をして、子どもは言語獲得の初期において既に核領域(Core Domain)として位置づけられるI-domainとV-domainを獲得しているが、C-domainは獲得していないと論じている。

近年、名詞句構造にも左周辺部があるという分析⁷があるが、これを前提としてMarinis (2004) は、(29) に示したように、名詞句構造を節構造 (28) に対応する3つの階層に分析している。ここでも構造上の最上位D-domainが名詞句の左周辺部となる。

(29) 名詞句構造 :	D-domain (DP)	F-domain (FP)	N-domain (NP)
インターフェイス :	Discourse Form	Grammatical Form	Thematic Form

上述の統語分析を前提として、Marinis (2004) は現代ギリシャ語の言語獲得の考察を行い、Platzack (2001b) と同様に、名詞句においても子どもは言語獲得の初期において既に(名詞句の)核領域として位置づけられるF-domainとN-domainを獲得しているが、左周辺部のD-domainは獲得していないと論じている⁸。

さて、第5節で指摘した属格の生起に関する問題を解くために、まず、Discourse Form、

Grammatical Form、Thematic Formという3つのインターフェイス・レベルは生得的に備わっているという仮定と、名詞句にも左周辺部があるものの、それを構成する範疇（究極的には素性）の獲得が遅れるというMarinis（2004）の提案も前提として、次節で説明をしたい。

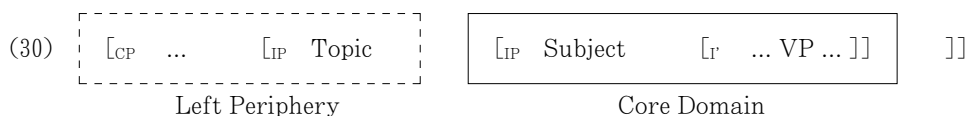
VII 提案

1 階層構造とインターフェイス

Marinis（2004）は、(28) に示した3つのインターフェイスは生得的に備わったものであると仮定している。言語獲得の段階で、それぞれのインターフェイスに対応する構造を構築するための範疇（究極的には素性）が獲得されて、それぞれの層の構造を構築したときに、それぞれに対応するインターフェイスで解釈を受ける。見方を変えると、3つのインターフェイスは対応する構造があればいつでも解釈をする準備ができている状態にあると言えるだろう。

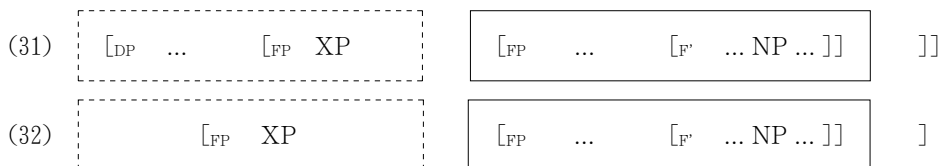
そこで、次のような可能性が生じると思われる。ある構造を構築するための範疇が獲得されていなくても、解釈するためのインターフェイスの準備はできているので、既に獲得している範疇を使ってそのインターフェイスで解釈を受けられるような構造を構築することができれば、そのインターフェイスは解釈をする、という可能性である。本稿では、それが付加構造（adjunction structure）がもたらす可能性であると主張する。

例えば、節構造での移動現象を考えてみよう。Lasnik and Saito（1992）は主節での話題化（Topicalization）はCP指定部への移動か、IPへの付加操作（adjunction）であると提案している。話題（topic）はRizzi（1997）の左周辺部に属す概念であるが、IPへ付加された場合は、Platzack（2001a）やMarinis（2004）らの言う、左周辺部より下位の領域（つまり、核領域）の要素に支配されていることになる。しかし、従来、付加位置は格や一致などと無関係の非項位置（A-bar position）と考えられていた位置であり、また、GB理論においては上位からの統率を許す位置であった⁹。したがって、(30) に示したように、IPへ付加された話題（Topic）は核領域ではなく、上位の領域（つまり、左周辺部）にあると仮定することも不自然ではないと思われる¹⁰。すると、話題の解釈を行うインターフェイスはGrammatical FormでなくDiscourse Formとなる。これが第1節で述べた、本稿が提案する（1）の仮説である。



- (1) 例えば、左周辺部のような統語領域XP (= CP) の解釈をするインターフェイスは、XP より下位の統語領域YP (= IP) に付加された要素 (= Topic) もXP (= Left Periphery) にある要素として解釈する。

この分析が名詞句構造にも適応できると仮定してみよう。例えば、Marinis (2004) の名詞句の分析を仮定すれば、(31) に示したように、IPに対応するFPに付加された要素XPは名詞句の左周辺部内にあることになる。そして、要素XPは左周辺部にあるので、その解釈を行うインターフェイスはGrammatical FormでなくDiscourse Formとなる。ここで注意すべきことは、(32) に示したように、範疇Dの投射が無くてもFPに付加されたXPは上位の領域に属すということである。

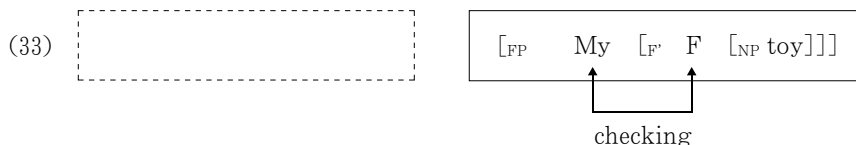


ここで思い出すべきことは、(15) から (17) に例示した所有属格を表す裸の名詞を説明するために、(30) に対応する構造分析を既にRadford (1990 : fn. 3) が示唆していたということである。それが名詞句内での付加構造 (20) である。

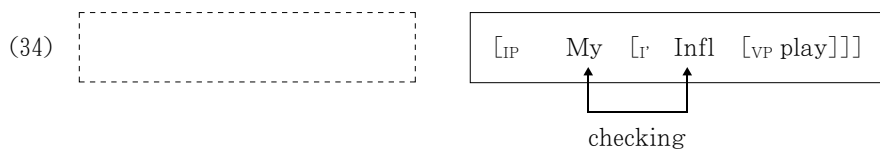


2 属格の認可

第6節で概観したMarinis (2004) が提案した名詞句構造を仮定して、言語獲得の初期段階に見受けられる属格人称代名詞が認可される仕組みを考えてみよう。この段階はF-domain (FP) とN-domain (NP) の獲得は行われているが、D-domain (DP) はまだ獲得されていない。しかし、3つの構造階層に対応するインターフェイスは生得的であるので、既に備わっている。Vainikka (1993/1994) が提案した獲得初期の格付与の仕組み (25) は、この枠組みでは (33) のように表すことができる。



属格人称代名詞myは格素性の認可を行う主要部Fにより格素性の照合 (checking) が行われる。そしてこの構造がGrammatical Formで解釈を受ける。この属格照合の仕組みが過剰に節構造に適用されてしまい、同時期の (34) でも属格の照合が行われてしまうのである。



次に、(15) から (17) で考察した、所有族格の名詞句に属格'sが生起しないという、裸の名詞に関する事実であるが、これは第1節で述べた仮説(2)によって説明されると提案する。

- (2) 子どもは初期の段階で既に付加構造を獲得している。よって、ある範疇Xをまだ獲得していない段階でも、XPより下位のYPへ付加された要素ZPをXPのためのインターフェイスでの解釈が可能となる。

具体的には、Daddy's new carを意味するDaddy new carは(35)の構造を持つと仮定する。

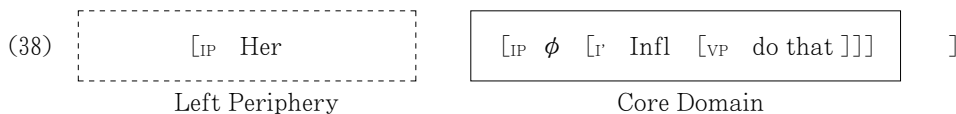


子どもは初期の段階で既に付加構造を獲得しているので、(35)に示したように、DaddyはFPに付加された要素であり、そのため核領域ではなく左周辺部にある。したがって、これはDiscourse Formというインターフェイスで解釈を受けることになる。Radford(1990: fn. 3)が示唆するように、裸の名詞であってもnew carの所有者(possessor)という主題役割が、Discourse Formにおいて語用論あるいは談話の仕組みによって決まると考えられる。

興味深いことに、Lebeaux(1987: 37)は、次のように対格人称代名詞(accusative personal pronoun)が主語として用いられた(36)の事例に対して、(35)と似た節の付加構造(37)を提案している¹¹。

- (36) a. Me got bean. (17ヶ月)
 b. Her do that (20ヶ月)
 c. Him gone. (20ヶ月)
 d. Me want one. (21ヶ月)
 e. Me sit there. (21ヶ月)
 f. Me have biscuit. (22ヶ月)
 g. Him naughty. (24ヶ月)
- (37) [_S [_{NP} Her] [_S [_{NP} ϕ] [_{VP} do that]]]

本稿が提案する仮説 (1) と (2) は、文や名詞句という区別はしていないので、(35) と同じような説明が (37) にも適用できる。

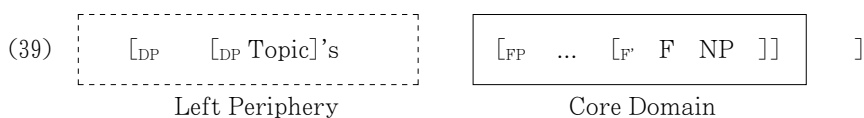


(38) で対格人称代名詞Herは左周辺部にあるのでDiscourse Formというインターフェイスで解釈を受けることになる。ここでもまた、対格人称代名詞であっても行為者 (agent) という主題役割がDiscourse Formにおいて語用論あるいは談話の仕組みによって決まると考えられる。

第4節で概観したように、名詞句での人称代名詞の属格認可が先に生じ、それが過剰に節構造に適用されて文主語として属格人称代名詞が生じるとVainikka (1993/1994) は論じているが、それと同様に、名詞句での付加構造が文構造にも適用して対格人称代名詞の主語が生起するようになるという分析が考えられる。

3 左周辺部の再分析

現代英語において、属格'sが付いた属格名詞が生起する構造位置を分析したHamamatsu (2000: 77) と福田 (2011) は、属格名詞が名詞句内部の話題となっているという仮説を提唱している。この提案はMarinis (2004) の分析 (29) を援用すれば、概略、(39) のような構造となる。話題となっているDPが左周辺部のDPの指定部にあるということに注意されたい。



子どもが持つ所有属格を表す構造 (35) と、大人が持つ構造 (39) との違いは、左周辺部を構成する機能範疇が獲得されているか否かという点である。そこで、第1節で述べた仮説 (3) が得られる。

- (3) 範疇Xが獲得されると、Xが構成するXPが対応するインターフェイスによって解釈されるようになる。

つまり、左周辺部を構成する機能範疇が獲得されていない場合、下位の機能範疇への付加構造によってインターフェイスDiscourse Formでの解釈がもたらされる。しかし、左周辺部を構成する機能範疇が獲得されると、その機能範疇が構成する構造によってインターフェイスDiscourse Formでの解釈がもたらされるのである。

VIII おわりに

本稿では、名詞句にも左周辺部があるという構造分析を前提として、第1節で提示した3つの仮説によって、獲得初期に所有属格として裸の名詞が用いられる仕組みを説明する試みを提示した。本稿を終るにあたって、(29)や(31)で示した名詞句構造がもたらす、名詞句内部での属格名詞の分布と、その構造投射に関する示唆に触れたい。

福田(2011)は、Marinis(2004)と同じく、名詞句にも左周辺部があり、名詞句構造もKP・DP・NPの3つの階層に分かれると仮定して¹²、NPの左側に生じる属格名詞のうち所有属格(4)、主格属格(5)、時間名詞属格(12)の構造位置の相違と統語投射の相違について次の3つの提案をしている。

- (40) 所有属格はDPより上位の位置KP内((29)や(31)のDPに対応)に生起し、属格'sは統語的な投射KPを形成していること。
- (41) 主格属格はDP((29)や(31)のFPに対応)の指定部にあり、属格'sは統語的な投射を形成しないこと。
- (42) 時間名詞属格はDPの付加詞((31)のXPに対応)であり、属格'sは統語的な投射KPを形成していること。

本稿の議論から、これら3つの提案内容がそれぞれ次に示すように英語獲得の過程の名残と結果であることが伺える。

- (43) 所有属格は英語獲得の初期にDPへの付加詞であり、左周辺部の機能範疇の獲得後は名詞句の左周辺部の話題句(Topic Phrase)の指定部にある。機能範疇の獲得後は格照合が統一的行われるが、所有属格はD((29)や(31)のFに対応)による照合領域の外にあるので、属格'sが投射を形成することで属格照合を保証するようになった。
- (44) 主格属格は英語獲得の初期からDP(FPに対応)の指定部にあり、D(Fに対応)による照合領域の中にあるので、属格'sは統語的な投射を形成する必要がなかった。
- (45) 時間名詞属格はいわゆるD(Fに対応)の修飾語であるので、DPへの付加詞として機能する。付加構造は英語獲得の初期段階で既に獲得されており、所有属格のために用いられていた。左周辺部の機能範疇の獲得後はDPへの付加構造が時間名詞属格のために利用されるようになった。しかし、この場合も付加詞であるため、属格照合の領域の外にある。よって、属格'sが投射を形成することで属格照合を保証するようになった。

本稿は限られた事実と分析を前提としているので、さらなる経験的事実の考察と理論の精密化

が必要であることは言うまでもない。また、推察に留まっている仮説の検証も必要である。今後の研究に委ねたい。

注

¹ 本研究は平成24年度科学研究費補助金(基盤研究(C) 課題番号:22520506 研究課題名 左周辺部構造と主語の特異性に関する統語研究 代表者 福田稔)の援助を受けている。

² 属格の種類日本語名称は天野(2006)に従った。

³ Chomsky(1986a)のように、属格がofとして現れるとする分析もあるが、Radford(1990:200)によると、これも初期の段階では顕在化しない。

- (i) a. [Cup tea] (= 'a cup of tea'; Stefan 1;5)
- b. [Bottle juice] (= 'a bottle of juice; Lucy 1;8)
- c. Want [piece bar] (= 'I want a piece of the chocolate bar; Daniel 1;8)
- d. Have [drink orange] (= 'I want to have a drink of orange; Jem 1;9)
- e. [Color crate] [Color new shoes] (= 'the color of the crate/of my new shoes; Anna 2;0)

⁴ その仕組みはRadford(1990:fn.3)が示唆するように、語用論の仕組みによると考えられるが、統語的には裸の名詞が名詞句内部での話題(Topic)になっているためであると後の節で論じる。

⁵ 本稿はこの示唆を支持する議論を行い、後の節で適切な修正を加えて関係する事実を説明する。

⁶ インターフェイスについてはChomsky(1995:168)を参照のこと。

⁷ これらの分析の代表的なものとしてAbney(1987)、Aboh(2004)、Haegeman(2004)などがある。現代ギリシア語における名詞句の左周辺部についてはMarinis(2004:362-371)を参照のこと。

⁸ Platzack(2001b)とMarinis(2004)によると、機能範疇の中でも左周辺部を構成する範疇(究極的には素性)の獲得だけが他の機能範疇の獲得より遅れるので、全ての機能範疇の獲得が語彙範疇より遅れると論じるRadford(1990)の主張とは部分的に一致しない。

⁹ Chomsky(1986b)の分節(segment)の考えを参照のこと。

¹⁰ (24)の破線で囲った部分は左周辺部を表し、実線で囲った部分は核領域を表している。以下の例でも同様の表記をする。

¹¹ O'Grady(1997:75)を参照のこと。ただし、O'Grady(1997:76)はLebeaux(1987:37)の分析の問題点を指摘しているが、ここでは紙面の都合上詳細な議論は控える。

¹² KP・DP・NPは(27)にあるDP・FP・NPにそれぞれ対応する。範疇の名称はMarinis(2004)と異なるが、基本的な考えは一致しているので名称の違いは問題とならない。

参考文献

- Abney, Steven (1987) *The English Noun Phrase in its Sentential Aspect*, Doctoral dissertation, MIT.
- Aboh, Enoch O (2004) “Topic and Focus within D,” *Linguistics in the Netherlands*, 1-12.
- Aboh, Enoch O., Norbert Corver, Marina Dyakonova, and Marjo van Koppen (2010) “DP-internal information structure: Some introductory remarks,” *Lingua* 120, 782-801.
- 天野政千代 (2006) 「’s属格形の名詞主要部との構造的関係」 *JELS* 23 (日本英語学会), 1-10.
- Bloom, Lois (1970) *Language Development: Form and Function in Emerging Grammars*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Bloom, Lois (1973) *One Word at a Time*, Janua Linguarum, Series minor 154, Mouton, The Hague.
- Braine, Martin (1976) *Children’s First Word Combinations*, Monographs of the Society for Research in Child Development 41, Serial no. 164, no. 1.
- Chomsky, Noam (1981) *Lectures on Government and Binding*, Foris Publications, Dordrecht.
- Chomsky, Noam (1986a) *Knowledge of Language*, Praeger Publishers, New York.
- Chomsky, Noam (1986b) *Barriers*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Chomsky, Noam (1995) *The Minimalist Program*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Declerck, Renaat (1998) *A Comprehensive Descriptive Grammar of English*, Kaitakusha, Tokyo.
- 福田 稔 (2011) 「属格名詞の構造位置について」『宮崎公立大学人文学部紀要』第19巻, 155-172.
- Haegeman, Liliane (2004) “DP-Periphery and Clausal Periphery: Possessor Doubling in West Flemish,” *Peripheries: Syntactic Edges and their Effects*, ed. by David Adger, Cécile de Cat, and George Tsoulas, 211-240, Kluwer Academic Publishers, Dordrecht.
- Hamamatsu, Junji (2000) “The Licensing of Genitive Case and DP-Internal Topicalization in English,” *Studies in English Literature*, English Number 2000, 67-85.
- Lasnik, Howard and Mamoru Saito (1992) *Move Alpha: Conditions on Its Application and Output*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Lebeaux, David (1987) “Comments on Hyams,” *Parameter-Setting*, ed. by Thomas Roeper and Edwin Williams, 23-39, Reidel, Boston.
- MacWhinney, Brian (2000) *The Childes Project: Tools for Analyzing Talk*, Lawrence Erlbaum Associate, Mahwah, NJ.
- Marinis, Theodore (2004) “Acquiring the Left Periphery of the Modern Greek DP,” *Peripheries: Syntactic Edges and their Effects*, ed. by David Adger, Cécile de Cat, and George Tsoulas, 359-382, Kluwer Academic Publishers, Dordrecht.

- O'Grady, William (1997) *Syntactic Development*, University of Chicago Press, Chicago.
- Platzack, Christer (2001a) "Multiple Interfaces," *Cognitive Interfaces: Constraints on Linking Cognitive Information*, ed. by Emile Van Der Zee and Urpo Nikanne, 21-53, Oxford University Press, Oxford.
- Platzack, Christer (2001b) "The Vulnerable C-domain," *Brain and Language* 77, 364-377
- Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech, and Jan Svartvik (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*, Longman (Pearson Education Limited), London.
- Radford, Andrew (1990) "The Syntax of Nominal Arguments in Early Child English," *Language Acquisition* 1(3), 195-223.
- Rizzi, Luigi (1997) "The Fine Structure of the Left Periphery," *Elements of Grammar: A Handbook of Generative Syntax*, ed. by Liliane Haegeman, 281-337, Kluwer, Dordrecht.
- Vainikka, Anne (1993/1994) "Case in the Development of English Syntax," *Language Acquisition* 3(3), 257-325.

